

WHOインターン報告 ～アスタナ会議の裏側～



京都大学医学部医学科4年
吉川健太郎

アジアと日本を結ぶ学生団体AJASTを設立
(京大生チャレンジコンテスト受賞、
日本インドネシア国交60周年記念事業認定)

はじめに

2018年8月～10月、スイス・ジュネーブにあるWHO本部(国際保健機関)にてインターンシップを行いました。幅広い業務を行い国際保健の中核とも言えるWHOですが、政策決定や国連外交に興味があった私は、国際会議の準備を行う医療政策局の中のプロジェクトチームに入れていただきました。そして、WHO創設以来最大規模の国際会議であるアスタナ会議の準備の手伝いをメインに、イギリスやカザフスタンにも同行させていただき、大変充実した日々を過ごしました。

背景

小さい頃から外交や国際政治に関心があった私は、大学に入学後国際保健分野にも興味を持ち始め、これらに関するイベントの補助や学生団体の立ち上げを行っていました。こうした状況の中で、世界の国際保健の最前線を見てみたいという気持ちが強まり、大学のカリキュラムの研究室配属期間を利用して、WHO本部に行かせていただきました。



WHO本部

インターンシップ内容

今回のインターンシップのミッションとして準備していたアスタナ会議は、WHOだけでなくUNICEFなど他の国連機関との共催で開かれるものでした。そのためインターン中はWHO本部内の会議に加えて、世界各地にあるWHO地域事務所やUNICEFなど様々な機関や部署の方々との会議にも出させていただきました。また、準備しなければならないことに比べて人員が少なかったことから、インターン生という立場を超え、想定していた以上のことをさせていただきました。ジュネーブの本部滞在中の主な仕事内容は、

- (1)国際会議に参加する各国の政府要人や国際機関、NGOの代表などへの招待状・参加者リストの作成
- (2)会議で採択される共同宣言文書の下書きや校正の補助、各機関からのコメントの編集
- (3)毎週開かれる加盟国代表者間会議の準備、議事録の作成

月曜は部署の会議、水曜はUNICEFや各国のWHO地域事務所とのテレカンファレンス、金曜は各国政府代表部との協議があり、それ以外でもILOやUNICEFなどを訪問し担当の方と話し合いを行いました。

会議以外の時間は、それぞれに与えられた個部屋で招待状の作成や会場図作り、メールのやりとりなどのデスクワークを行っていました。

宣言文書の各国の交渉過程や運営上の様々な点については口外厳禁ということでここでは述べませんが、当初8月末から9月上旬の大筋合意を目指していたにもかかわらず延びに延び、最終的に合意が得られたのは10月の会議直前でした。国連の会議で出す文書は、アメリカのような大国であろうとアフリカの小国であろうと関係なく全会一致が原則です。経済力やこれまでの支援の歴史などから会議の中で影響力を持っている国はありますが、最終的な決議を前に落とし所を探らなければならず、会議中のみならず会議合間のコーヒープレイクや非公式のミーティングなどでも常に妥協点を探っていました。

アスタナ会議

今年のWHOのテーマは「ユニバーサルヘルスカバレッジ(UHC)」であり、来年の国連総会におけるハイレベル会議のテーマもUHCとなっています。UHCとは「全ての人が生涯を通じて必要な時に基礎的な保健サービスを負担可能な費用で受けられること」を意味しており、国連の持続可能な開発目標(SDGs)においても、ゴール3(健康と福祉)の中でUHCの達成が掲げられています。このような流れで開催されたUHCに関する国際会議「アスタナ会議」はWHO創設以来最大規模のものとなり、開催地カザフスタンでも建国以来最大の国際会議となったそうです。そのためWHOだけでなくカザフスタン政府や保健省・

外務省・大統領府が一丸となって様々なイベントを開催し、大変素晴らしい会議となりました。

初日の夜は国立オペラホールにてカザフスタンで最も有名なオペラ歌手やバレエダンサーたちによる舞台を鑑賞し、閉会式では同国の有名なポップ歌手たちによるコンサートを楽しみ、そして最終日の夜は晩餐会にも招待していただきました。

また治安があまり良くないためか、基本的に移動は全てカザフスタン側が用意したパトカーによる先導付きでした。日本のように大規模な国際会議を定期的で開催している国ではあまり見られない厚遇ぶりに驚きましたが、世界各国から政府要人やVIPが来ているこの機会を使ってカザフスタンを最大限に知ってもらおうという熱い気持ち伝わってきました。

印象に残ったこと

国連職員の働き方

日本の働き方との違いに驚きました。職員は皆個室で仕事をしており、会議や相談事がある時のみ会議室や廊下で話し合うという形でした。

就業時間も特に決まっておらず、基本的に各自思い思いの時間に出勤し、仕事にひと段落がついたら帰る(中には昼に帰ったりする人も...)という感じでした。私の直属の上司は小さい子供がいたため、結構な頻度でテレワーク(自宅仕事)をしていました。国際会議の直前など準備で忙しくなってきた時は遅くまで残っておられました。特に忙しくない時期は18時にはほぼ人はいません。

働き方改革を進めようとしている我が国にとって、このような多様な働き方を実際に見たり体験することは非常に有意義だと思いました。

インターン生の地位

世界中から物凄い数のインターン志願者がいる国連ですが、インターンは基本的に無給です。そのため、世界で最も物価が高い都市の1つであるジュネーブでの生活は各国の学生達には大きな負担と



国連欧州本部内の総会議場にて

なります。こうしたことから、ジュネーブにある各国連機関のインターン団体と事務局が交渉し、インターン生に優しい施策がとられるようになってきました。「食事代は1日1300円までWHO負担」「コップ、ペン、ノートなど必需品の支給」など、ここ数年でインターン生の環境も少しずつ変わってきているようです。

休日の過ごし方

WHOでは、土日は仕事をせずにしっかり休むようにと通達が来るほど、厳格に休みが取られていたため、毎週末旅行に出かけ、充実した休日を過ごすことが出来ました。ユーレイルパスというヨーロッパ全域の鉄道が乗り放題となる鉄道パスを購入し、ジュネーブ近郊の町や周辺諸国を鉄道で巡っていました。アルプスの絶景をハイキングしたり、ミュンヘンで開かれた世界最大のビール祭り”オクトーバフェスト”に参加したり、南フランスの海岸でのんびりお昼寝をしたりと、週末は最高のリフレッシュとなりました。

終わりに

初めてWHOの建物に入った時から最後のお別れを言う日まで、全てが新鮮で興奮の毎日でした。国連職員がどんな日々を送っているのか、各国の外交官たちがどう交渉しているか、国連の会議が

どう準備されているのか、挙げだすときりはありませんが、これまで遠い世界だと思っていたことを実際に内側から見て手伝わさせていただき、自分がこれからの人生で何をしたいのか考える大きな助けとなりました。

この冊子を手にとされている皆様の中にはWHOでのインターンシップに興味を持たれている方もいらっしゃると思います。「まだまだ知識がないから..」とか「英語力が通用するか不安だから..」などと悩んだりせず、思い切って飛び込んでしまうことをお勧めします。必ずやLife-changingな経験をいただけることと思います。

最後になりましたが、インターン前よりお世話になり続けました日本WHO協会の中村安秀理事長、厚労省の井上肇様(現国立国際医療研究センター)、そしてジュネーブ滞在中にいつも気にかけてくださった日本政府代表部や日本人職員会の皆様方に、この場をお借りして厚く感謝申し上げます。ありがとうございました。